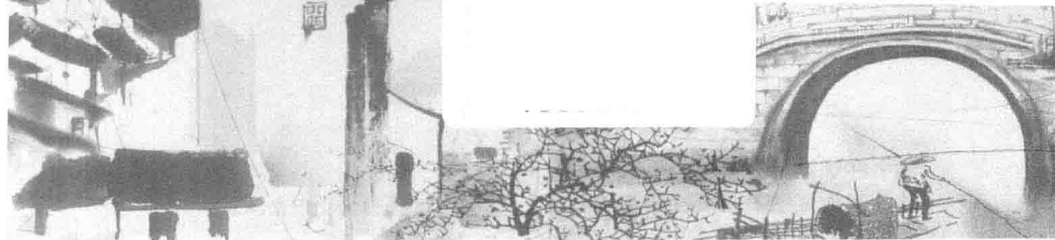




从认知语言学的角度
浅析鲁迅作品
——鲁迅をシナジーで読む

(日) 花村嘉英◎著



从认知语言学的角度
浅析鲁迅作品
——鲁迅をシナジーで読む

(日) 花村嘉英◎著



华东理工大学出版社

上海

图书在版编目(CIP)数据

从认知语言学的角度浅析鲁迅作品 / (日)花村嘉英著. —上海:
华东理工大学出版社, 2015.11

ISBN 978-7-5628-4407-5

I. ①从… II. ①花… III. ①鲁迅小说-小说研究-日文
IV. ①I210.97

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2015)第 245239 号

从认知语言学的角度浅析鲁迅作品

著 / (日)花村嘉英

责任编辑 / 嵇 蕾

责任校对 / 张 波

封面设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

地 址: 上海市梅陇路 130 号, 200237

电 话: (021)64250306(营销部)

(021)64252875(编辑室)

传 真: (021)64252707

网 址: press.ecust.edu.cn

印 刷 / 虎彩印艺股份有限公司

开 本 / 890mm×1240mm 1/32

印 张 / 3.5

字 数 / 101 千字

版 次 / 2015 年 11 月第 1 版

印 次 / 2015 年 11 月第 1 次

书 号 / ISBN 978-7-5628-4407-5

定 价 / 38.00 元

联系我们: 电子邮箱 press_wy@ecust.edu.cn

官方微博 e.weibo.com/ecustpress

天猫旗舰店 <http://hdlgdxpbs.tmall.com>



まえがき

2009年2月に中国に渡り、複数の大学で日本語教育に取り組んだ。また、中国関連の学術研究にも興味があり、文学では日本ゆかりの作家魯迅を考察し、言語では東アジアと欧米の言葉について東西で比較を試みた。しかし、本書では、それらを全体的にまとめるために、テキストをマクロに分析する場合に、どのような準備が必要になるのか考えていく。

テキスト分析では、ドイツの作家トーマス・マンを題材にして文理の共生について考えた「計算文学入門」(2005)という自著がある。一般の読みと特殊な読みからなるテキスト分析で、前者は読者の脳の活動(受容)を表し、後者は作家の脳の活動(共生)を考察している。こうした分析からできる組み合わせは「シナジーのメタファー」と呼ばれる。トーマス・マンの場合は、彼の文体であるイロニーとファジィの相性のよさから作家の脳の活動をファジィとし、「トーマス・マンとファジィ」というシナジーのメタファーを作った。

同様の手法でLのストーリーに適応可能な作家を探した。もちろん誰もが知っている国を代表する人がいい。資料も豊富で皆が関心を持っているからである。魯迅は清代末期に日本に留学して医学を学び、帰国後は精神的な病に苦しむ中国人民を作家として治療した。魯迅の作品は、しばしば教材にも取り上げられ、今なお読み継がれている。

魯迅のテーマは馬虎であり、文体は従容不迫である。馬虎とは詐欺をも含む人間的ないい加減さのことをいい、従容不迫とは落ち着いていて慌てる様子がないことをいう。

魯迅は記憶についても言及がある。小説を読みながら阿Qや狂

人のことを考えているうちに、あるとき記憶とカオスの結びつきに気がついた。そこで受容の際に「馬虎と記憶」という解析の組みを作り、共生については「記憶とカオス」という組みを想定した。

収録されている論文は、これまでに学会で発表をし、有識者の方たちと意見を交わしたものである。第一章の『『狂人日記』から見えてくるカオス効果について』は、2013年10月に中国の重慶市にある四川外国語大学で開催された中日国際シンポジウムで取り上げられている。第二章の「サピアの『言語』と鲁迅の『阿Q正伝』」は、サピアの言語論を適用したテキスト分析であり、文理の共生を目指した内容になっている。

また、若い頃から技術文の翻訳に従事し、「人文科学から見た技術文の翻訳技法」というレポートを作成している。さらに、53歳のときに健康管理士の講座に参加して、健康についても考えを深めることができた(日本成人病予防協会—健康管理士一般指導員認定(2015年3月))。こうしてテキストの共生といえる実績が一応整った。そこでテキストをLに分析するシナジーの分析法について言語を問わず説明するために日本語の論文を英訳し、中国語や日本語以外の研究者にも参考になるように配慮した。

花村嘉英

2015.7

* なお、中国新聞出版の規定により、

- ① 図表のタイトルは上に載せている。参考文献の[M]もまた同規定による。
- ② かぎカッコの使い方については、著作に『』を、短編や論文に「」を当てている。

目 次

1. 「狂人日記」から見えてくるカオス効果について — 認知言語学からの考察 —	1
Chaotic Effect Expected from “A Madman’s Diary” — Consideration from Cognitive Linguistics —	27
2. サピアの『言語』と魯迅の「阿 Q 正伝」	47
“Language” of Sapir and “The True Story of Ah Q” of Lu Xun	77
付録 1 文学と計算のモデル	97
付録 2 「シナジーのメタファー」の詳細なプロセス	99
あとがき	102

1. 「狂人日記」から見えてくる カオス効果について —認知言語学からの考察—

[要 旨]

「狂人日記」から見えてくるカオス効果を題材にして「魯迅とカオス」というシナジのメタファーを考察する。最初に認知言語学における一般的なメタファーの分析について考える。シナジのメタファーは、その上位概念である。「狂人日記」が執筆された当時の中国は、内戦と列強国との戦いを繰り返す二重の戦争状態にあり、中国人民の振舞いは無秩序で不規則なものであった。

主人公の狂人は、被害妄想に罹っている。そのため、当時の中国人民が決して言わないような社会批判を繰り返す。狂人が受け取る入力、一般の人の入力と少しずれていると考えてもおかしくはない。

カオスの特徴は、文理を問わずどの分野でも非線形性と非決定論である。この2点を「狂人日記」から引き出すことができれば、作品を執筆している時の魯迅の脳の活動はカオスに通じることになる。作家の思いと人工知能が照合できれば、自ずと客観性が生まれる。

[キーワード]

認知言語学 シナジのメタファー 被害妄想(統合失調症)
覚醒 カオスの特徴

1 認知言語学の現状

1.1 認知言語学の概要

認知言語学は、人間の認知能力を問う学問である。認知能力とは、一般的に周囲の環境から情報を受け取り、それを記憶に貯えて、必要に応じてその情報を呼び出すことができる力のことである。この3つのプロセスをそれぞれ組みで考えてみよう。

まず、環境から情報を受け取る知覚のプロセスでは、感覚器官から入ってくる情報に注目するため、対象を捉えるとき目のつけどころが重要になる。従って、このプロセスでは「知覚と注意」という組み合わせが成立する。次に、獲得した情報は記憶として蓄えられるため、そこから人間の知識が生まれる。この段階では「学習と記憶」という組み合わせが成立する。受け取った情報は、計画を立てるプロセスでも役に立つ。その際、目的に応じて問題を分析し、解決策を探っていく。しかし、獲得した情報が完全でないと推論が必要になる。3つ目の段階では「計画と推論」という組み合わせが成立する。

表1 認知能力のプロセス

認知能力のプロセス	解 説
①知覚と注意	感覚器官からの情報に注目することから、対象の捉え方が問題になる。例えば、ベースとプロファイルとか視線の移動。
②学習と記憶	外部からの情報を既存の知識構造へ組み込む。この新しい知識は、スキーマと呼ばれ、既存の情報と共通する特徴を持っている。また、未知の情報についてはカテゴリー化される。このプロセスは、経験を通じた学習になる。
③計画と推論	受け取った情報は、計画を立てるプロセスでも役に立つ。その際、目的に応じて問題を分析し、解決策を探っていく。しかし、獲得した情報が完全でないと、推論が必要になる。

認知能力が言語に組み込まれる様子を探るために、これらの3つの認知能力について詳しく見ていこう。(大堀, 2002)

「知覚と注意」のプロセスは、対象の捉え方が問題になる。例えば、知識の成り立ち全般に通じるイメージの知覚は、ベースとプロフィールという組が例になる。ベースとは対象を認知する際の背景知識であり、プロフィールとはそのうちの焦点が当たる部分をいう。この場合、円がベースとなれば、弧はプロフィールの関係になる。

また、このプロセスでは、視線の移動も考えることができる。対象が移動や変化を伴う場合に、視線は移動しながら何かをスキャンしている。例えば、卓球のボールがスライスするのを連続写真のように目で追うような捉え方が連続スキャンニングであり、一枚の静止画のように時間の推移を考慮しない捉え方が要約スキャンニングである。

「学習と記憶」のプロセスでは、外部から情報を取り入れて、それを既存の知識構造に組み込んでいく。その際、新たな情報は、具体例と比較され抽象化されてから組み込まれる。この抽象的な知識は、スキーマと呼ばれる。スキーマ化は、具体例と共通する特徴を抽出するためのプロセスであり、経験を通じた学習といえる。スキーマとは、物だけではなく、感覚や行動にも当てはまる知識である。そのため定着が進めば、場面に応じて記憶の中からスキーマを呼び出すことが可能になる。

こうした能力は、「計画と推論」のプロセスの中で機能する。日常の認知活動は、部分的に情報を補いながら、必要な情報を調節している。ここでの調整役は人の推論である。推論については、これまでに多くの研究がある。話ことばの場合は、対話の場面において相手の意図を理解するために推論が使われる。これはまた、テキスト分析のレベルでもいえることである。

著者が試みたトーマス・マンの『魔の山』の研究でも、主人公のハンス・カストルプと他の登場人物との対話を通して、トーマス・マンのイロニーとファジィ推論が両立するかどうかを検証してい

る。(花村,2005)

3つの認知能力の中で「学習と記憶」については、さらに興味深い例がある。このプロセスで新たに獲得した情報は、グループ化されることがある。これはカテゴリー化と呼ばれ、ある対象がそこに属するのかどうかを判断している。古典的なカテゴリーは、命題が真か偽かを問う論理学の中で議論されたため、カテゴリーのメンバーも整然と区別されていた。

しかし、カテゴリーは、中心的な役割を果たすプロトタイプとその周囲に置かれるメンバーからなっている。つまり、カテゴリー間の境界は、ファジィとするほうが適しており、認知活動にはファジィらしさが多く含まれている。例えば、筆者が試みた、「トーマス・マンとファジィ」の研究もその一例である。(花村,2005)

カテゴリーは、場面に応じて捉え方が変わったり習慣化されたりして、放射状に拡張していく。例えば、プロトタイプやメタファーのような理論を統一するために、多義性のネットワークに関する多くの研究が知られている。一枚の紙、一枚のはがき、一枚の便箋、一枚上、一枚舌、一枚岩といった日本語の類別詞「枚」の意味のネットワークは、すべてのメンバーに共通する性質が見出せなくてもよい。

放射状のカテゴリーは、プロトタイプからの慣習化されたメンバーが二次的な役割を果たして、リンクを張っていく。つまり、ネットワークの中心から他のメンバーが外れていくということではない。また、カテゴリー化のレベルでいえば、一枚のはがきと一枚の便箋は、上位にある紙を介して下位にリンクが張られている。(大堀,2002)

1.2 メタファーの役割

日常経験に基づいた推論は、具体的なカテゴリーが問題になる。しかし、文学作品などでよく見る抽象的なカテゴリーは、そもそも作家が何か具体的なことを表現するために使われている。

こうした抽象的な概念と具体的な概念との間には何らかの関係が成立する。このような対応関係は、一般的にメタファーと呼ばれる。

メタファーを図式化すると、理解のもとになる根源領域から理解の対象になる目標領域への写像関係が作られる。このメカニズムは、抽象概念を引き出すとともに、言語表現による意味の拡張としても理解される。そこには慣習化されたものもあり、その場合は言語表現の問題ではなく、思考や概念のレベルで写像が生まれる。

例えば、メタファーを表すために「〇〇は△△である」という表記を用いる。ここで〇〇が目標領域であり、△△は根源領域である。メタファーは、直接知覚しにくいものを理解させてくれる。但し、根源領域の構造が目標領域に写像されると、関連事項を調節するために推論が必要になる。

メタファー(1): 黄鶴楼が武漢のシンボルなら、第一橋は武漢の大動脈である。

条件文(1)の前半でメタファーを導入し、後半はそこからの推論を使用しながら、対応する部分を述べている。(1)のような推論は、真偽というよりも何とからしさが問題になる。メタファーによる推論は、問題解決のための発見とか意思決定の力ともいえる。また、対象となる概念領域がかけ離れているのに、ひらめきにより類推が効く場合がある。それが正しいという保証はないが、未知の領域を理解するために既知の知識をあてはめてみると、うまくいくこともある。

さらに認知言語学は情報を受け取ると同時に、ある場面のイメージを作る方法についても研究を進めていく。世の中を客観的に捉える方法は、社会や文化により異なってくる。言語の違いにより異なる思考のレベルが考察対象になるためである。言語と思考の

問題については、サピアと彼の弟子のウォーフの研究が知られている。(第二章を参照すること)

サピア・ウォーフの仮説：母国語の構造は、認知能力のような言語から独立した思考、例えば、推論に影響を与える。

この仮説に関する一般的な解釈は、言語が思考に少なからず影響を与えるという立場を取る。しかし、知覚や記憶のメカニズムは、言語によって決まるわけではない。思考については、対象の捉え方や判断の仕方に関する高次の認知能力が問われるようだ。どういう記憶が残りやすいのか、記憶ごとの結びつきはどのようなかを考えると、社会共同体の輪郭や違いが見えてくる。(大堀, 2002) 一般的に、既知の情報については推論を用いることにより、そして未知の情報についてはカテゴリー化することにより我々は情報を整理している。

1.3 シナジーのメタファー

認知言語学が処理するメタファーには、①慣習のメタファー、②汎用のメタファー、③イメージのメタファー、そして④詩のメタファーがある。①は「陽はまた昇る」のような日常経験を基にしているため、あまり意識されることなく使用される。②は「時間は空間である」といったメタファーのことであり、時空が表す出来事へと拡張される。例えば、「弟が眠っている」は「眠る」と「いる」により空間の中で弟の状態が継続的に捉えられる。③は文学作品に多く見られるが、慣習化の度合いが低いために、創造的なイメージがつきまとう。④は複数のメタファーが幾重にも同時に作用するため、少ない数のことばから豊かな表現が生まれる。(大堀, 2002)

これらのメタファーの上位概念として、本論文ではシナジーの

メタファーを考えていく。伝統的な縦の研究は、AとBからA'とB'を出すことが目標である。一方、シナジーの研究は、AとBから異質のCを出すことが目標になる。シナジーのメタファーも通常の写像関係を踏襲し、Aが根源領域、Cが目標領域、Bはその写像という対応関係を取る。そして、シナジーの組み合わせとしては、文学と論理計算を想定しているため、Aは人文科学、Bは認知科学、そしてCは脳科学になる。



図1 シナジーのメタファーのプロセス

筆者は、「トーマス・マンとファジィ」というシナジーのメタファーを作るために、論理文法による分析を試みたことがある。(花村, 2005) また、ここ数年は、魯迅や鴉外の作品を題材にして、「魯迅とカオス」とか「鴉外と感情」という組み合わせを考えている。これは、「トーマス・マンとファジィ」とは異なる言語でシナジーのメタファーを作成するためである。

魯迅の「阿Q正伝」に関する論文では、サピアの言語論を基にして、中国語と日本語から見えてくる思考様式の違いについて考察している。魯迅は学生時代に日本に留学しており、彼自身も中日の思考様式の違いについて思うところがあった。そして、当時の中国人が罹っていた「馬々虎々」という精神的な病を嫌って、「阿Q正伝」の主人公阿Qに自分を重ねてそれを強く人民に訴えた。こうした魯迅の作家人生からシナジーのメタファーを作るために、「馬々虎々」をカオスのモデルとリンクさせながら、「阿Q正伝」に見られるカオスの世界を海馬モデルにより説明している。(第二章を参照すること。)

なお伝統的な縦の研究の場合は、作品を受容するということで読者の脳が想定される。一方、シナジーの研究については、作家が執筆している際の脳の活動がポイントになる。(例えば、知的財産)そのため、AとBから異質のCという公式の中で、Cを脳科学にした。その際、CからBへのリターンも想定の内にある。

「経営工学」とか「社会とシステム」または「法律と技術」といったその他の文理融合の組み合わせと比べると、「計算と文学」の場合は、文から理へのストーリーを作る際に、Bから異質のCへ橋を架けるとところが難しい。そのため、文系から寄せた場合、中間のBまできて、異質のCのイメージがぼんやりと見えてくるぐらいが関の山である。つまり、AとBの塊を作る事が多くて、そこから異質のCが出てこない。「阿 Q 正伝」の分析では、阿 Q の記憶に絡む言動を抽出し、そこに同期と非同期の関係を見出して、カオスと記憶の話に橋を架けた。(第二章を参照すること。)

例えば、阿 Q が飢えた狼の目を認識する際、まず連続した物体の存在認識が必要になる。阿 Q の視神経は、狼の目の領域とそれ以外の空間から入力情報を受け取り、それぞれが同期と非同期の関係になる。狼の目は動くので、同期する場所は常に変化していく。そのため、同期と非同期は、速やかに処理されなければならない。津田(2002)によると、カオスはこれを容易にする仕組みである。

「狂人日記」は、被害妄想を患う狂人が狂気から覚醒し食人を改心させようとして説得を繰り返す筋立てである。狂人の思いは、食人が一線(門)を越えることができるかどうかにある。一線を越えることができれば、本当の人間になれるからである。

本論文では、こうした意思決定のポイントを狂人の意識と照合しながら、カオスと関連づけて考えている。最初に述べたように、カオスには二つの基本的な特徴がある。一つは、振舞いが無秩序なために予想ができなくなる非線形性である。また一つは、入力が僅かに異なるだけで全く異なる出力が出る非決定論である。

2 狂人日記の認知プロセス

2.1 狂人と覚醒

魯迅の「狂人日記」(1918)は、中国近代文学史上初めて口語体(白話文)で書かれた。当時の中国社会を人が人を食う社会と捉えて、救済するには肉体よりも精神の改造を必要とした。中国の支配者層が食人的封建社会を成立させるために儒教の教えを利用したからである。しかし、結局は虚偽にすぎず、「狂人日記」の中に登場する礼教食人を生み出した。魯迅は死ぬ直前まで、「馬々虎々」(詐欺も含む人間的ないい加減さ)という悪霊と戦った。この悪霊を制圧しない限り、中国の再生はありえないという信念があったからであろう。(片山,2007)

主人公の狂人は、被害妄想を患っていた。但し、従来の狂人の扱いについては、中国と日本で違いがある。中国での見方は以下の三つである。

- ①主人公の狂気は見せかけであり、反封建の戦士というもの。
- ②主人公の狂人は本当であり、反封建の戦士ではなく、反封建思想を託されたシンボルというもの。
- ③迫害にあって発生した反封建の戦士というもの。

一方、日本の見方は、「主人公の狂気は覚醒した」となっている。(大石,1996)

本論文では、狂人の狂気は覚醒したとしながらも、同時に狂人が発する中国人民への説得も認知プロセスと関連づけて考えていく。つまり、人間が野蛮であったころは人を食いもした。しかし、よくなろうとして人間を食わなくなったものは、本当の人間になった。こうした努力こそが大切だとするリスク回避による意思決定論を見ていきたい。

狂人は確かに狂気に陥っている。狂人の発病時期を考えると、30年ぶりにきれいな月を見たという書き出しの日記のため、相応の年月が経っていると見なすことができる。20年前に古久先生の古い出納簿を踏んでいやな顔をされた中学生の頃には、症状が周囲からも見て取れた。

鲁迅は日本留学中(1902—1909年)に個人を重視する近代ヨーロッパの精神を学んでいる。これは鲁迅にとって、儒教を抛り所とする封建的な物の考え方とは全く異なる革命的思想であった。これを狂人が狂気に陥った一要因とするのはどうであろうか。

覚醒の時期についてもいくつかあるようだ。(大石,1996) 例えば、

- ①歴史書を紐解いて食人を発見した場面。
- ②またひとつは、妹の肉を食う場面。家族が食人の世界とつながり、自分もその中にいることを発見した場面。
- ③そして、「子供を救え」と訴える個人と中華民族の再生を望む場面。

これらの場面と狂人が人民に向けて説得を繰り返す場面を認知プロセスと関連づけるために、以下で狂人の言動を見ていこう。(以下の表は、一対一の中文と和文ではなく、ストーリーを掴むための場面の対照表である。和文は筆者が翻訳したものである。)

表2 狂人の言動

番号	中文	和文
第1章 月夜の晩		
1	今天晚上,很好的月光。我不见他,已是三十多年,今天见了,精神分外爽快。……那赵家的狗,何以看我两眼呢?我怕得有理。	今夜はいい月である。見なくなつて三十年余りになる。今日は見たため、気分がとても爽やかである。…。趙家の犬がどうして俺を見るのだろう。俺が怖がるのも当然である。
第2章 出納簿		
2	赵贵翁的眼色便怪:似乎怕我,似乎想害我。还有七八个人,……又怕我看见。一路上的人,都是如此。其中最凶的一个人,张着嘴,对我笑了一笑;我便从头直冷到脚跟,晓得他们布置,都已妥当了。	趙貴翁の目つきがおかしい。俺を怖がっているようでもあり、俺をやっつけようとしているようでもある。他の七、八人も…俺に見られるのを怖がっている。道行く人も皆そうであった。その中で一番質の悪い奴が俺に向かって笑いかけやがった。全身でゾッとした。解った、彼らの手配はもうできたのだ。
3	小孩子的眼色也同赵贵翁一样。只有廿年以前,把古久先生的陈年流水簿子,踹了一脚,……赵贵翁虽然不认识他,一定也听到风声,代抱不平;……但是小孩子呢?那时候,他们还没有出世,何以今天也睁着怪眼睛,……我明白。这是他们娘老子教的!	子供たちも目つきが趙貴翁と同じであった。二十年前、古久先生の出納簿を踏んづけたことがある。…趙貴翁は、古久先生と知り合いではないが、噂を聞いて怒っていた。…子供たちは、その時まだ生まれていないのに、なぜおかしな目つきで睨むのだろう。…分かった。彼らの親たちが教えたからだ。